
エデンの花に髪留めを

秋姫優姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エデンの花に髪留めを

【NZコード】

N1413X

【作者名】

秋姫優姫

【あらすじ】

舞台はユーヒ大陸の西端に位置する王国エデン。

歴史上最大の死者となつたテンガク大戦争から10年が過ぎようとしていた。

国と国は同盟を結び、戦争の爪跡を大きく残しながらも世界は平和に向かつていた。

同じく平和を主張する王国エデンだつたが、裏では世界を大きく変える力を持つた「パンテロシック」の開発に成功する。

それを持っていたかのように、約1年前。

王国エーデンと国境を挟むように突如建国された帝国テヴァ。

帝国テヴァは平和を主張する国々とは一切同盟を結ぶことはなく、逆に圧倒的な武力でその存在を大きくしていった。

物語は王国エーデンと帝国テヴァの運命の下にいる1人の少年と王女。

そしてその仲間たちから動き出す。

帝国テヴァの目的は？王国エーデンの未来は？

そして少年たちの答えは？

城門の大きな鐘の音があかね色の空に鳴り響くと、Hテンの森の鳥たちが一斉に飛び立つていった。

エデンの城下町の隅々にまで届いた5回の重低音は、今の王国エデンの平和の象徴であり、夕方の5時を知らせるこの町のシンボルでもある。

テンガク大戦争から10年。王国エデンは至る所に戦争の傷跡を残しながらも、一歩ずつ平和を取り戻していた。

「姫様はまた抜け出したのか！」

鐘の音が鳴り終わると城の中は一段と騒がしさを増す。

「申し訳ありません！夕方のレッスンのためにお部屋へ伺つたところ、既にもぬけの殻で。」

「いいから探せ、探すんだ！」

城下町とは反対側のエデンの森側の城壁。

テンガク大戦争の影響により、押すと城壁のレンガが外れて子供1人がやつと通れるくらいの隙間ができる場所があるのを、この国の王女アマーサ・シュシユケルト以外に知る者はいなかつた。

通る時にだけレンガを外し、通り抜けるとレンガを戻す。戦争から10年もの間、誰にも気付かれることなく王女を自由の世界へ羽ばたかせる魔法の道だ。

夕方5時とはいえ、たくさんの葉が夕焼けの光を遮る森の中は外灯もあるはずがなく夜に近かつた。

城とエデンの森は直通で帰るのには数分。この時間に森に人影はなく、誰にも見つからない。

この魔法の道は城の離れのために、森から城に戻る際にも見つかる心配はない。

城の兵士たちは、いつの間にか王女が城に戻つてきている。そんな平和な毎日を送つていた。

エーテンの森の奥。この森に存在する唯一の小屋から少年少女が外に出てくる。

木造のその小屋は、民家というより秘密基地に近い。

「そろそろ帰らないと。さすがにお父様が心配するわね。」

一国の王女は背伸びをして森の澄んだ空気を吸うと他の3人と向かいあい手を振つた。

「シユシユ、暗いし城の前まで送るよ。」

「大丈夫よ、クーちゃん。それより急がなくちゃ。部屋でグース力寝てるジルによろしくね！」

そう言うと城のほうへ駆け出していく。

「大変だね、お姫様つてのも。」

「クーガー、僕はね、走つて揺れない胸には興味は無いんだよ！！」

「リクさん、最低です。」

「行こうか、ミウちゃん。」

その後も胸について力説するリクを無視してクーガーとミウは先に小屋へ戻つていった。

「兄さん、いい加減起きてください！」

エデンの森の小屋からミウの声が聞こえると、それをうるさそうに目をこすりながら兄のジルがゆっくりと身体を起こした。

幼い頃から両親と呼べる存在がいなかつたジルとミウ。数年前までは、城下町の叔父の家で暮らしていたが、今ではこうして2人で自立して暮らしている。

この森にこの小屋を作ったのが、ジルたちだった。ジルとミウの兄妹にリクとクーガー。そして、王女シユシユ。5人は幼馴染であり、数年前の事件をきっかけに、その絆は強くなっていた。

「兄さん、今日はトンカツにしてみたの。」

「え、朝から！？」

「…嫌だつたですか？」

その大きな瞳をうるうるさせながら見つめられると兄のジルに残された選択肢はたつた一つ。

「おかわり。」

ミウの顔は天使のように晴れやかになつた。

ジルは週に5日、王國エデンの南の国境沿いにあるベルカ鉱山に足を運ぶ。この鉱山には高値で売却できる鉱石が多く採れるためだ。この日は丸一日働いて4200ミルを手にした。100ミルで牛乳が買え、500ミルで弁当が買え、1000ミルあれば城下町の定食屋で相当の食事が堪能できる。ジルの収入のみで兄妹2人の生活を支えているために貯金は無く、その日暮らしを強いられていた。このコーヒ大陸ではミルという共通の通貨単位が使われている。ミルという共通の通貨単位が採用されたのはテンガク大戦争の後のこ

と。偉い人が経済の統一性だとか、格差社会がどうとか言っていたが、ジルには全く関心の無いテーマだった。

生活が苦しいとはいって、リクたちやその両親が差し入れを小屋に運んでくれるために食事に困ることはなかった。裕福とは言えないが、確かな幸せがこの小屋にはあった。

「レベンズ様！たつた今、シャン大佐がお戻りになられました！！」

エデン城の謁見の間。深紅に鳳凰の彫刻が威圧的に輝く玉座には国王レベンズ・シュシユケルトが腰を下ろしている。その隣の一回り小さな玉座には女王アマーサ・シュシユケルトの姿があった。

「シャンベルカ・ストレルカ、未来都市マリアより只今戻りました。

「シャン大佐という兵士が、国王の前に敬意を示すがごとく頭を下げひざますく。

「これ。楽にしてくれ、シャン大佐。そなたには感謝しておる。さて、例の件は？」

「はい、上手くいきそうです。さすがは未来都市マリア。あの技術力は100年は他国追随を許さないでしょう。私も少し休んだら次はロゼへ向かおうと思います。」

他の兵士とは違ひ純白の鎧に身を固めているその男は、たちまち周囲の兵士たちの話題の標的となつた。

「おい、あれが薔薇騎士シャンか。」

ヨーヒ大陸にその名を轟かせるこの男。

通称、薔薇騎士。

名前が知れ渡つているシャン大佐だからこそ外交関係がスムーズに行えるため、日々、他国を飛び回つてゐる。

「シャン様！」

国王と薔薇騎士の話が一段落すると、珍しく静かに玉座に座つたアマーサ・シュシユケルトが立ち上がり純白の鎧に飛びついた。

「アマーサ様、半年振りですね。大きくなられましたね。」

「もう、様付けしなくていいつたら。」

抱きついたままの女王様は、頬を膨らませた。

「今日は何日くらいHテンにいらっしゃるの？」

「久しぶりの帰国なので、3日ほどはゆっくりをさせていただこうと思います。」

アマーサ・シュシュケルトはそれを聞くと周囲に会話を聞かれないようここにシャン大佐の耳元で囁くように提案した。

「じゃあ、森の小屋へ行きましょう。ジルたちも逢いたがってるわ！」

シャン大佐は左耳を髪で完全に覆い隠しており、右耳しか見えないその瞳で笑い、そして頷いた。

そのままアマーサ・シュシュケルトは反転して父でもある国王レベンズ・シユシユケルトの顔を合わせると、シャン様と出掛けてくると強く言い放つた。

国王もシャン大佐には絶大なる信頼があり、滅多に外出を認めないが今回ばかりは首を縦に振つた。

「ジルか、久々に稽古でもしてやるかな。」

左腰に金色に輝く名刀・ロゼリウスに純白の鎧。この国で知らぬ者はいないほどの男、薔薇騎士が森の小屋へと足を運ぶ。

先ほどまで降っていた雨はあがり、森の木の葉から太陽の光を纏つた雲が滴り落ちた。

地面のぬかるみが歩くたびに気になるが、薔薇騎士にはそれ以上に我が国の王女を気にかけていた。

「アマーサ様、折角の綺麗なお洋服と靴が泥で汚れてしまします！」

「もう、二人きりの時くらい王女扱いしないで！」

次第に鳥の声が増えはじめ、黒い雲は西の空へ流れていった。なるべく水たまりを避けてジルの小屋を目指し歩いているが、確実に汚れないのは無理な話だった。

「アマーサ様！私がおぶつて差し上げます！」

ほら、と言わんばかりにシャンはしゃがみ背中をシュシュに向ける。最初は渋っていたシュシュだが、シャンの押しに観念したのか。仕方ないわねと愚痴をこぼしながらも背中に身体を預けた。

薔薇騎士の純白の鎧の足元は、白の面影は無い。

どうせシュシュが鎧の汚れを気遣つたところで、シャンは間違いなく汚れなど全く気にせず逆にシュシュを気遣つだらう。

大切なものを守るためになら己の命すら惜しまないだろう。薔薇騎士とはそういう男だ。

さすがに王国エデンで初となる20代で大佐の地位を獲得しただけはある。

太陽が顔を出して、はじめは2つ横に並んでいた影は1つになった。国を守る騎士と国を守る王女。この1つになつた影は王国エデンの未来すら背負つている。そんな気がした。

シユシユを背負い10分ほど歩くと、ようやく小屋に辿り着いた。

「シ、シャン先生！？」

小屋の前には、2つの見覚えのある顔があった。

「クーガー！相変わらずのイケメンだな。」

王国エーデンでもクーガーほど顔立ちのいい人間を見たことがないのは事実だが、色恋沙汰を聞いた事は無かつた。

「リクピードも。久しぶりだ。」

シャンは、クーガーの左隣にいるリクにも話しかけた。

しかし、半年振りの再会の喜びを表現する笑顔はリクの表現にはない。

「シユシユを、おんぶだと…」「いやま死刑！」「いやま死刑だ！！」

そのままリクは、シャンに指をさしながら羨ましいと死刑をつなぎ合わせた言葉を放つた。

背中のシユシユはその言葉に顔を赤くして、その背中にありがとうという言葉を残し、ピヨンと背中から飛び降りた。

「くそつ、爆発しろ！！爆発しちまえ！！」

こうなつたりクは止まらない事を知つてゐるために、シユシユとシャンは苦笑いを。隣のクーガーが冷たい視線で傍観という選択肢を選んだようだ。

すると、すぐにリクは我に返つたような表情を見せて独り言のように呴きはじめた。

「いや、待て。シユシユに背中に密着されようが胸が無いから当たらぬじゃないか！」

クーガーとシャンは既に直視出来ないほどの禍々しいオーラを放つシユシユを横目で見ると、ご愁傷様でしたという表情を見せた。

「はっ、なんだ。そうだよ。所詮はべつたんこシユシユか。僕としたことが何を焦つてしまつたんだ。ふつ、まだまだ僕もぐぼふあ！」

？

リクの独り言は最後まで語られる事なく、シユシユの左ボディーブローからの右アッパーでリクは地面に崩れ落ちた。

これが格闘技の試合なら間違いなくレフェリーが試合を止める一撃だったが、もちろんレフェリー不在のためにシユシユの猛攻は続行された。

「今日は絶対に死なすんだから！」

死なずと連呼しながらシユシユは、綺麗なロングヘアをなびかせ地面に横たわるリクを何度も何度も踏み潰す。

「ああきもちいい、もつと！もつと踏みにじってください……！」

ドMのリクには逆効果で目を輝かせてヨダレを垂らしている。

「もう、リクさんー、ついから静かにしてくださいー！」

小屋のドアが開き、ミウが顔を覗かせた。

「あれ、シャンさん！？シャンさん！？あれ？」

ミウはシャンの突然の訪問に顔を出しながら驚き慌てた。

「ミウちゃん。お兄さんはいるかな？」

シャンは、小屋からぴょーぴょーと歩きながら出てきたミウに優しく話しかける。

「じめんなさい、兄さん今日は仕事お休みなんですけど稽古に出来かけちゃったの。」

ミウは申し訳なさそうに頭を下げた。

「シャン先生。ジルの稽古場ここから近いですけど顔出しに行きますか？」

「うん、クーガー。案内してくれるかい？」

「案内もなにも、俺たちが出会つた場所ですよ。」

そう話すと少しだけクーガーの表情が曇つた。

「 フラン地下通路か。 」

シャンは髪で隠れている左田を気にする素振りを見せた。

「 ちょうど、アマーサ様も落ち着いたみたいだし皆で行きましょうか。 」

ごめんなさいね、と顔で訴えるシユシユの後ろではリクがピクピクしている。

ちょっと火の元だけ確認してくると小屋に戻ったミウを待つて、起き上がりないリクを置いてフラン地下通路へ向かうことにした。何故か全員が穏やかではない表情だった。

エデンの森を南に抜けてしまらく歩くと、フラン地下通路の入り口が見えてくる。

隣国のロゼの国境付近に位置するこの通路は、そのはるか昔からエデンとロゼを結ぶ通路として利用されてきた。

しかし、今現在、フラン地下通路は封鎖された状態になつていた。10年前のテンガク大戦争の頃からか、ちょうどエデンとロゼの中間の国境上にある地下通路の大広間に1頭の竜が住みついたからだつた。

もちろん、竜など架空上の生物であり信じる者も少なかつたが。当時は竜の存在が浸透してなく、その地下通路入り口と大広間入り口を兵士たちが常に見張りをしている状況だつた。

今ではエデンで竜のことを知らない人物を教えてほしいくらいだ。

いつの間にか輪の中に紛れているリクも含めて、封鎖された入り口に人一人がやつと入れるくらいの隙間をくぐり抜けて地下通路の中に入る。

長い間使われていなっために松明の明かりなど無く、奥に行けば行くほどに闇が力を増していく。

シャンが右手の手のひらを上に向けると詠唱もなしに、それこそ松明ほどの大きさの炎を出してみせた。薔薇騎士と呼ばれるように剣術はもちろんのこと、魔術も王国エデンでは5本の指に入るほどの実力者である。

それを明かり代わりにしてシャンを先頭にさらに奥へと進んでいく。しかし、シャン達には笑顔も、会話さえも無い。

フラン地下通路。ここはジル達と、当時少尉だつたシャンがはじめて出会つた場所。

そして、シャンがジル達の命を救つた場所。

右手で明かりを灯しながら、シャンは髪の毛で隠されている左の目を気にしていた。

今から3年前。ジルやリク、クーガーにシュシュが15歳。ジルの妹のミウが14歳のある夏の日のことだった。

当時はエデンの森に小屋も無く、ジルとミウは叔父の家に住んでいた。毎日のように皆で集まつては、冒険と称して危ない場所へ足を踏み入れていた。

「『めんなさい、城を抜け出すのに手間取っちゃって。』

シュシュが息を切らし名も無い木の下で先に待つて居るジル達のもとへ駆け寄る。

いつしか待ち合わせ場所になつたエデンの森名も無い最大の木。他の木々と比べると5倍以上の高さを誇る。森の外から見ると、この木だけが異様なほどに頭を出している。

「あとはクーガーとアリスだけだな。」

遅れること数分、異常なまでの美少年と美少女がようやく到着する。この頃から王国エデン随一のイケメンであるクーガーは、この木に辿り着くまでに何人もの女の子に声をかけられ時間に遅れることがしばしばあった。

ただその女の子たちも、隣にいるアリスを見るとお似合いね、と諦めるしかない。

華奢な身体に長い黒髪に白い肌。さらに整つた顔立ちは本物の王女であるシュシュすら超えるほどの魅力と気品を感じさせる。

クーガーとアリスは家も隣、生まれた日も1日違い。人生で顔を合わせない日は無いほどでジル達の公認の仲でもあった。

「さて、みんな揃つたところで今日はどこへ行くのかしら?」

冒険を一番楽しみにしているのは、王女という名の下に自由を奪わ

れてきたシュシュだつた。

「兄さん、あまり危ないところは私困りますよう。」

この6人のリーダー的存在はジル。皆もジルを信頼していて、現に今までジルを頼り事故などは一度も無かつた。

「みんなさ、ドラゴンって信じるか？」

ジルのその発言に皆は顔を合わせた。

「まさか、フラン地下通路か？無理無理。第一、兵士たちが見張りをしてるんだから中には入れないし。」

クーガーが久々にジルに反対の意思を示す。

「兄さん、危ないです！反対です！ダメ、絶対です！」

当然、ミウも反対している。

「あら、いいじゃない、ドラゴン！！冒険の匂いがするじゃない。」

逆にシユシユは賛成。それにリクも続いた。

「わ、わたしも。ドラゴンって見て見たいかも・・・。」

反対するクーガーの横で申し訳なさそうに左手を挙げながらアリスが答えた。

結論、見張りの兵士がいるんだから行けるところまで行って帰ろうとジルが反対派をまとめ上げてフラン地下通路へ向かうことになつた。

まさか、こんなにあっさりと地下通路に入れるとは提案したジルさえも思わなかつただろう。

確かに、地下通路の入り口には見張りをする王國エデンの兵士がいた。しかしその兵士は木陰で居眠りという職務放棄。正面から堂々と侵入に成功した。いや、堂々と正面から入つているんだ。侵入といつ言葉すら似合わない。

ドランゴンが現れた頃は物珍しさからか見物人が後を絶たず、兵士による警備も今より何倍も厳重だつた。今ではその存在、危険さが王國エデン中に知れ渡り、ここ2～3年はフラン地下通路に近付いた者さえいない。

どうせ誰も来ないといつ兵士の怠慢が侵入を容易にした。

地下通路の中はまるで洞窟のようで。本来なら闇に包まれる通路も、この時の地下通路にはまだ兵士の見回りもあつたため一定間隔で壁に灯りがかけられていた。

そのため足元に心配はなく、すんなりと奥に進むことができた。

地下通路の長い長い下り坂を歩いていくと、

誰にも見つかることなく、あっさり大広間に辿り着いた。

「しつ、誰かいる。隠れよう。」

ジルが人の気配を察し、みんなを近くにあつた巨大な岩の陰に誘導する。

子供6人が隠れても十分なほどの大好きな岩の陰から、兵士2人の存在を確認した。

その兵士たちは、しばらく話しこむと出口のほうへ歩いていった。

大広間は地下通路の中でも特に音や声が響きやすく、兵士たちの会

話もところどころは聞こえたが大人の男性特有の低い声は聞き取りにくく、すべてが聞き取れた訳では無かつたが。

どうやら、ちょうど見張り交代の時間のようだ。ジルは、今がチャンスだ。行くぞ。と立ち上がるが、その返事は消極的だつた。何故か大広間には灯りが少なく、この先の道に何があるのかすら見えない。それほどだつた。

それが今までの冒険には無かつた心の底からの恐怖心が足を進ませない。はじめは乗り気だったのが嘘のようだ。

「早くしないと兵士が戻ってきてきちゃうよ。」

それでも結局立ち上がつたのはシュシュだけで。他のみんなは岩陰から出ようとはしなかつた。

ジルは2人だけでもと、立ち上がつてシュシュの手を引いた。

「ちょっと！ なんで手なんか握つてるのよ！」

「暗くて危ないだろ。女の子が怪我したらどうすんだ。」

他のみんなは、結局私をお姫様扱いする中で。彼だけは私をお姫様扱いせず女の子として見てくれる。今回もそう。お姫様だから危ないじゃなくて女の子だから危ないと手を引いてくれた。大広間に灯りが少なくて本当に良かつた。顔が赤いのバレてないかしら？

そんな気持ちを知らずにジルは、シュシュの手を引きながら歩く速度を早めた。

ジルとシュシュの後ろ姿を見ながら、岩陰は修羅場となっていた。

「ねえ、ちょっと兄さんとシュシュさん手繋いでませんか！」

騒いでいるのは珍しくミウだった。

「私だけ兄さんと最後に手を繋いだのは26日前なのに何なんですか兄さんたらーーー！」

「あ、兄弟愛ですか！いや、まで。これはもつと深い。こいつあ兄と妹の禁断の愛ですね！もう手やら何やら絡み合ってムヒョッスー！」

その隣でリクも暴走しはじめてしまい、ツツコモのシュシュがいな

い今、詰んでいる。

「もう兄さん！私も危ないですから手繋いでくださいーーー！」

そう言いながらミウはジルの後を追い暗闇へ走り出してしまった。

「ミウちゃん一人じゃ危ない。俺たちも行こう、アリス。」

クーガーはアリスへ手を差し出し、しつかりとアリスは額きその手を握る。

ミウを追つ後方から、うらやま死刑ーうらやま死刑ーと声がするが振り返ることは無かつた。

「え、なにこれ。牢屋？」

先に進んだジルとシュシュの目の前には巨大な鉄格子が、まるでここから先は通さないとばかりに暗くて見えない天井の先にまで壁のように立ち塞がつた。

「ジル、この奥にドラゴンがいるのかしら？」

「いや、生き物の気配はしないな。」

危険もないようなので、しばらく鉄格子を調べていると、扉があるのを見つけた。

「鍵穴だな、鍵は間違いない王國エーテンが所有。これ以上は無理だ

な。
」

追いついたクーガーがアリスの手を握りながら、もつ片手で鉄格子の扉をガシャガシャと開けようとするが、もちろんびくともしない。「兄さん、手を離さないでくださいね！怖かったら抱きついてもいいんですよ？別に、仕方なくですからね！兄さんが怖いならあどうぞ抱きついてください！」

隣ではミウが目を瞑りながら両手を広げている。

「さて、どうするか。」

ジルは、そのミウの頭を撫でながら皆の顔を見渡した。

「ちょっとじめん、5秒ちょうどいね。」

シユシユはそういつつと、一瞬のうちにポケットから針金を取り出した。

それを鍵穴に差し込むと、力チャ力チャと中で動かす。力チャつと扉から音がすると、次の瞬間には扉が開いていた。

その間、わずか2・8秒のことだった。

「さあ、行くわよ。」

「いやいやいや、シシ「ミビ」ころ満載だよね。何今の！？」

「つるさいわねクーガーは。私を誰だと思ってるの？脱走姫アマーラ・シユシユケルトよ？」

誇らしげに笑いながらシユシユは答えた。

「国王！ フラン地下通路の扉が何者かによつて開かれました！」
王国エーテンの管理室に扉が開いた反応があり、城では大騒ぎになつてゐた。

「鍵は盗まれていないうな？」

「はい、問題ありません。特殊な構造の鍵ですので、この鍵が無いと絶対に開かないはずなんですが。」

その鍵を針金で2・8秒で開けられちゃつたと知つたら、どんな反応を示すだらうか。

「ほう。見張りは何をしておるのかのつ。至急確認させろ。」

お怒りの国王のもとへ、もう1人の兵士が駆け寄つてきた。

「申し訳ございません、国王！ アマーサ王女がまたしても脱走しました！ どうやって鍵を開けたのかは分かりませんが。」

「馬鹿な、今度の鍵はフラン地下通路の格子扉並のセキュリティを。ま、まさか！？」

国王は立ち上がつた。

「今動ける部隊は大至急フラン地下通路へ向かわせろ！ 全部隊だ！ 敵は獄竜！ 殺せるもんなら殺して構わん！！」

兵士は無線で連絡を取り合つ。一番地下通路に近い者でも到着まで10分はかかるようだ。

「国王レベンズ。やはり鍵を開けたのはアマーサ王女。」

「アレスよ、早くに息子を失い今度は娘まで失うことになつたら。シユシユケルト家に与えられた新しい2つの命。その2つともを失うこととなつたらワシは先代に顔向けできん！」

国王レベンズの怒りと動搖がこの謁見の間を支配していた。

「時に国王レベンズ。シャン少尉がロゼに里帰りしております。」

2本の角が生えた兜。背中には三つ又の槍。戦神と呼ばれる男は謎かけのように国王に問いかけた。

「私を試すとは面白い男よの、アレス。」」で冷静さを失っていたワシは玉座に座つておらん。」

「承知しております。」

「99%。鍵はアマーサが開けたとみて間違いない。さて、ロゼ城とフラン地下通路は直通なのは存じてるか？ロゼ城からなら5分足らずで大広間に間に合う。」

国王レベンズは、左後ろに立つアレスを横目で見つめる。

「アレスよ、今すぐにシャン少尉に連絡は取れるか？」

「いえ、無理です。もう既にフラン地下通路に向かわせておりますから。2度の連絡は不要でしょ。」

その言葉に国王レベンズは、はつはつはつ、と笑ながら玉座に寄りかかり謁見の間の高い高い天井を見上げた。

鉄格子をくぐると、さらに暗闇となり数メートル先に誰がいるのかさえ見えないほどだつた。

おい、みんないるか？その問いに返事だけはあるものの、誰がどこにいるのか。おおよその場所さえ把握出来ない。

「いーないな、ドラゴン。」

ジルが気配を感じないのなら、そこにはないと言つていい。それほどジルは、気配を感じとる能力に優れていた。

「仕方ない、見せてあげよう。僕の力を！」

次の瞬間、リクを中心に灯りが広がつていった。リクの右手を見ると、火の玉が浮いている。

「リク、マジで魔術使えたんだ。」

「当たり前じゃないか！初級魔術塔の主席だぞ僕は！」

王国エデンには兵士を育てる環境として、剣術と魔術の学校のようなものがある。それが塔であり、初級、中級、上級と分かれている。上級を卒業すると、念願の兵士になれるというシステムだ。

中級は16歳、上級が18歳からのため、現在15歳のリクは初級魔術塔。クーガーは初級剣術塔で兵士に向け勉強中の身だ。余談だが、クーガーも初級剣術塔の主席である。

年齢がクラスアップの資格条件で、その年の実技試験に合格すると上のクラスの塔へ行ける。

上級の塔の実技試験。つまり、兵士になれるかなないかの試験はかなり鬼畜で、合格者は1割と言われている。そのため、どうしても兵士になりたいが合格できずに30年ほど上級の塔に通い続け、そして諦める者もいたと聞く。それほどに王国エデンの兵士は厳しく、そして強い。

「 . . . ぐるぞ！！」

何かを感じ、ジルが叫ぶ。

「 気配を殺してたのか。それも、完璧に。」

落ち着いたジルとは裏腹に、他の全員は恐怖に潰されていた。
体長は5メートルほど。緑と黒に彩られた体に光る目。時の紋章の
ような鱗。リクが照らす光に姿を見せたのは、紛れもなくドラゴン
だった。

寝ていたが火に反応して目覚めたようだ。

「 なんだ、あまりでかくないんだな。」

見上げるジルの後ろでシュシュ達は恐怖で声も出ず、よつやくミウ
が甲高い叫び声をあげた。

あまりの恐怖に叫び立ちすくむ!!ウをシユシユが強引に引っ張り、アリスをクーガーがおぶり竜から遠ざかる。

「おい、ジル！何をしてるんだ、殺されるぞ？」

「……ジル？」

リクの呼び掛けに返事は無く、ジルはただ田の前の竜を見上げ田を輝かせていた。

誰が見ても竜と戦う気満々の意志が伺えるようだ。

「まったく、ジル。そつやつて1人で突っ走るのはきみの悪いところだ。」

リクは後ろすさりしていた両足を前に進め、ジルの隣に並んだ。「不思議なものだ。もう恐怖すら感じない。いや、もう恐怖などとうに越えたのか。この勝負、まず勝ち田は無い。一撃。たつた一撃喰らえれば僕たちは死ぬだろう。それでも戦うのか、ジル？」

「ああ。」

「ふうー、何がきみをそんなにかき立てるのか。しかも僕の初めての実戦の相手が人じゃなくて竜とは。」

ジルに武器はなく、リクに使える魔法は塔で習った初級魔術のみ。もちろん、竜が手加減をするはずがない。

「死ぬなよ、リク。」

「付き合わされる」つちの身にもなってくれよ、ジル。」「ぐるぞ……」

「シユシユ、足元気を付けて。」

竜からは遠ざかつたものの、リクが炎から遠ざかつたために辺りは

暗闇近い。鉄格子の扉の方角がわかるはずもなく、手探りで竜がいる場所から確実に遠ざかっていた。

「アリス、大丈夫か？」

「こんな状況まで他人を気遣えるのね、クーガー。」

「茶化すなよ。ミウちゃんは……大丈夫そうじやないな。」

「うわあああああん……お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん……」

「こら、泣きながら暴れないでよ。手を引っ張るこいつらの身にもなつてほしいわ。」

泣き暴れるミウをなだめながら、小さく肩でため息をついた。

「というかシユシユ。なんでそんな冷静なんだ？」

「なんとかしら。自分でよくわからないの。……あら？」

シユシユは後ろを振り返った。

「今、鍵の開く音がしたわ。」

「したわって、確定かよ。あっちって、ロゼ側だろ？」

「鍵の音ならすぐに分かるわ。大好きだもの、鍵の音。」

「……そうか。」

シユシユの大好きといつ言葉に、少しじドキッとしたクーガーだった。

竜が右の前足を振り落とすと、それを避けるようにジルとリクは左
右に散る。

「IJの暗さで何故竜はここまで正確に僕たちの位置を。しかし、ここで灯火をつけたら竜に殺してくれと言つていいようなもの。」暗闇からぼんやりと見える姿。それを頼りに避けるのが精一杯で、攻撃に転じる隙がなかつた。

ジルは余裕だな。
それに比べて僕は。
何のための塔の修行だ。

「リク、危ない！！」

ジルの叫び声に上を見上げると、竜の巨大な爪が勢いよくリクを切

「うああああああああ!!?

どうさに左へ転げ飛ぶと、間一髪。竜の攻撃を避けきった。

を実感する。

「無理がな、アガハ、三国の兵二十九、一勝二敗、わけない！」

「それは聞き捨てならないな。王国エデンに属する兵士。その1つの魂は王国が誇るべき宝とも言つていい。無論、獄竜にさえ負

になし

ジルとリクの目の前に、薔薇の形に彩られた炎が現れる。それは薔薇の形をした炎なのか。炎を纏った薔薇なのか？それはとても美しい、音闇を穿つ光の一回りいざ。

その炎を見た竜は、ゆつくり後ずさりをする。

「炎を薔薇の形に？魔法を何かの形にすることさえ超高等技術だ。しかもそれを詠唱無しで。もはや人間業じゃない。」

光に包まれた先に1人の兵士がいた。純白の鎧を纏った男。

「折角の休暇にこんな場所へくるとは。鉄格子の鍵が開くとね、王国に通報が入る。はじめはどこの盗賊団かと思つたらまさか子供とは。」

「王国？王国の兵士？王国エーテンの兵士が何故ロゼ側から？」

純白の鎧の男とリクは話を続ける。

「先日、私の母であるカヨーテ・ストレルカが亡くなつた。その最期の顔を見にな。」

「カヨーテ・ストレルカ！？ロゼ女王！？その息子だつて！？」

「申し遅れたね。私はシャンライカ・ストレルカ。王国エーテン少尉だ。」

左手を握り自分の胸に当てる王国エーテン特有の姿勢。これが現在は大佐であるシャンとの出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1413x/>

エデンの花に髪留めを

2011年11月24日14時54分発行